

序

奈良国立文化財研究所でやっている平城宮跡の発掘調査も今年（昭和40年度）で7年目を迎えることになった。この間、いろいろな面で何かと難しいこともあつたが、幸に大方諸彦の絶えざる御援助によつて、この仕事を担当する平城宮跡発掘調査部に、第一、第二、第三、第四の4つの調査室と、保存整理室と、史料調査室とが設けられ、これ等各室に所属する研究員も部長以下44人の多数を算えるに到つた。これは昭和34年度にはじめてこの仕事に取り組んだ時の状態からすれば、まったく考えられもしなかつたような大きな発展で、これがこんなに大きな発展を致したのは、何んといつても、平城宮跡の文化財としての価値がきわめて大きなものであることが、ひろく一般からも、強く認識されたからだといわなければならないだろう。たしかにこの平城宮跡の価値の非常に大きいことは、その全域がほとんどそのままに残されていたという、他にまったく類例がないような好条件に恵まれていたとはいえ、実際に掘つてみなければ何とも判らない地下の遺構や遺物が、現実にまざまざと実に数多く発掘されて、それ等が在りし日の平城宮の実体を、われわれの眼前にまことによく示してくれたからである。それは、これまでの既刊3冊の報告書にもその一斑が明らかにされたように、この平城宮における各種各様の建造物の有様が次第によく判つてくると共に、またその建造物を用いたいくつかの官衙の内容、実態といつたようなことまでもかなりよく推察されるに到つて、従来とかく限られた史料だけによつて考えられていた奈良時代史の研究に、きわめて大きな寄与をなすことになったわけである。ことにこの報告書などにも収められている多数の木簡の出土は、奈良時代の生の文字による史料の追加として、その意義のきわめて大きいことは、いまさら贅言を要さないだろう。そしてこれ等の事

々は、今後さらに発掘調査をつづけることによつて、ますますその価値を増大することは、期して待つべきものがあるように思われる。

この平城宮発掘調査報告第4冊には、昭和36年度の第7次調査、37年度の第8次調査、38年度の第9次調査等の成果をまとめた。したがつてこれにはまだ平城宮の全貌を予想するに足るような重要地域の調査にはほとんど及んでいないといつてよい。しかし前にも一言したように、この仕事に携る人員もようやく整備されてきたので、今後はさらに一層努力して、よりすばらしい報告書をお目につけたいものと念願している。もつともこの報告書をまとめるについては、いつものことながら、平城宮跡発掘調査指導委員会、とくに常任指導委員である、浅野清、有光教一、井上光貞、太田博太郎、岸俊男、小林行雄、塚本善隆、直木孝次郎、福山敏男、水野清一の諸先生をはじめ、さらに小原二郎、北村大通、樫崎彰一、山崎一雄およびマネー・エル・ヒックマン等の諸先生に何かとお世話になつた。ここに記して厚く御礼を申し述べたいと思う。そして皆様の今後とも変らぬ御力添えを心から庶幾う次第である。

昭和40年11月

奈良国立文化財研究所長

小 林 剛